同時開催

本日の上映パフォーマンス「ホルムアルデヒド・トリップ」の
展示バージョンをご覧いただけます。あわせてお楽しみください。

展　示

無料・予約不要

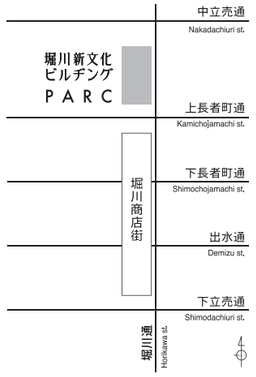
［ホルムアルデヒド・トリップ］

2024.1.13㊏〜〜〜〜〜〜1.28㊐

13:00〜19:00（水・木曜日は休廊）

会　場：Gallery PARC

展示アーティスト：ナオミ・リンコン・ガヤルド



□京都市バス「堀川中立売」バス停・徒歩1分
□地下鉄烏丸線「丸太町」駅、
「今出川」駅から徒歩20分
□地下鉄東西線「二条城前」駅・徒歩20分
駐輪場・駐車場（3台）

Gallery PARC
〒602-8242 京都市上京区皀莢町287（堀川商店街北側）
堀川新文化ビルヂング 2階

Tel ：075-334-5085
Mail：info@galleryparc.com
URL：https://www.galleryparc.com

Exhibition

上映パフォーマンス「ホルムアルデヒド・トリップ」 2017年 ／ サンフランシスコ近代美術館との共同制作

アーティスト｜ナオミ・リンコン・ガヤルド　　パフォーマンス｜サン・チャ、ダニシュタ・リヴェロ

字幕翻訳｜林かんな
字幕制作協力｜有限会社ホワイトライン

音　響｜植松幸太
照　明｜鬣恒太郎
映　像｜田村美希
字幕オペレーション｜水野慎子

舞台監督｜十河陽平（Sogo Technical Desgin）

フライヤーデザイン｜mondo
記録動画｜加藤文崇（les contes）
記録写真｜麥生田兵吾（合同会社ウミアック）

コーディネーター｜勝冶真美（Gallery PARC）
正木裕介（Gallery PARC）
制作補助｜高坂玲子（Gallery PARC）
前田瑠佳

京都精華大学｜マイノリティの権利、特にSOGIをはじめとした〈性の多様性〉に関する知識と、それらを踏まえた表現倫理のリテラシーを備えたアートマネジメント人材育成プログラム「あなたの隣を歩く人がいる」

本事業は、京都精華大学が2021年度から実施しているアートマネジメント人材育成プロジェクト です。基本的な人権についての知識と表現の倫理をめぐるリテラシーをもち、アートを創造する現場で必要な配慮をしながら実務にあたることのできる人材の育成を目指し、人種・民族・ジェンダー・セクシュアリティ・階級といったさまざまな権力関係が交差する現代社会の諸側面について学ぶレクチャーやゼミ等を開講しています。　（あなたの隣を歩く人がいる 公式WEBサイト→）

［主 催］京都精華大学
［共 催］京都市、公益財団法人世界人権問題研究センター、京都芸術センター（公益財団法人京都市芸術文化協会）、一般社団法人HAPS
［協 賛］株式会社グランマーブル

プロジェクト監修｜山田創平（京都精華大学国際文化学部長・教授）　プロジェクトコーディネーター｜内山幸子　企画協力｜吉田守伸

●令和５年度 文化庁 大学における文化芸術推進事業　●上映パフォーマンスとアーティスト・トークは「KACパートナーシップ・プログラム2023」（共催事業）採択事業

京都精華大学 KYOTO SEIKA UNIVERSITY　京都市 CITY OF KYOTO　KYOTO ART CENTER 京都芸術センター　HAPS　GRAND MARBLE KYOTO　文化庁　大学から文化力 POWER OF CULTURE

ホルムアルデヒド・トリップ

The Formaldehyde Trip
Performative Screening / Artist's talk

上映パフォーマンス
［ホルムアルデヒド・トリップ］

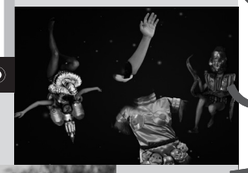
2024.1.14㊐ 18:00開演

京都芸術センター フリースペース（南館1階）
Kyoto Art Center Multi-purpose hall

アーティスト・トーク

2024.1.13㊏ 16:00〜18:00

京都芸術センター 大広間（西館2階）
Kyoto Art Center Japanese style hall



言い返せない言葉を言い返せ！あなたの力を取り戻せ！

ナオミ・リンコン・ガヤルド

サン・チャ／ダニシュタ・リヴェロ
Naomi Rincón Gallardo
San Cha/Danishta Rivero

コロナ禍のメキシコ・オアハカ州で現代美術や民俗についてのフィールド調査を行った清水チナツさんと
メキシコをフィールドに人類学と文学の間で翻訳について研究する鋤柄史子さんに、
本作を深く理解するためのテキストを執筆いただきました。

彼方此方に、突然に命を奪われ、暮らしが壊され、住み慣れた土地を追われる人たちがいる。そんなとき、失った多くのものに胸を痛めながら、誰しもが問う。「ほんとうに大事なものはなにか？」「取り戻すべき日常とはどんなものか？」。その切実な問いは、一度はこの世にユートピアを出現させるが、瞬く間に消えてゆく。東日本大震災の後、東北でそのもどかしさを抱えていたわたしが、わずかな情報と勘を頼りにたどり着いたのが、ナオミ・リンコン・ガヤルドが拠点のひとつとするメキシコ南部のオアハカ州だった。わたしは2020年3月から一年半、オアハカのセントロ地区に暮らした。オアハカでの日々を回想しながら、ガヤルドがあらわそうとしたものに、手を伸ばしてみたい。

オアハカは先住民族が多く、伝統的な文化や祭礼が色濃く残る土地だということは聞いていた。「素朴な」とか「手つかずの」と形容されるような土地柄であることをガイドブックで読んだ記憶もある。しかし到着後、そのイメージは崩れ去り、鮮烈で多彩な声にとって代わられた。通りを歩くだけで、ここに暮らす人々が何に憤り、何を愛しているのかが幾重にもかさなって聞こえてきたのだ。

たとえば、至るところに現れるストリートアートからは、先住民や女性、子どもたちの尊厳を守ろうという声が絶えず聞こえ、畑で穂を揺らすトウモロコシは、それが遺伝子組換種の輸入を阻止し、守り抜かれた在来種なのだと語る。市場に並ぶ花々は、死者に花を手向けよ、忘却は二度目の死を意味するのだとささやき、コミュニティラジオの電波は多様な先住民言語で地域の課題をシェアする。アーティストの工房では、声を持たない者たちに声を与え、炭焼き台の上で煮えたぎる鍋は、何世紀にもわたり混ざり合った植民地の歴史の複雑な味を教える。毎週のように組織される市民のデモの隊列は、政府の無能さを告発し、抑圧された者同士の連帯を呼びかけ、道を占拠し開かれるパーティーのスピーカーは、集い踊れと鳴り響く。

衣食住の隅々に、オアハカに暮らす人たちが守り抜いてきた文化の生態系とそれらをめぐる闘いの痕跡が感じられたが、それは碑や像といった類のものではなく、つねに生きられることで人々の血肉となり、死後も精神として継がれる種のものだった。人々はよく「Bonito／Bonita」と口にし、この世界の何がうつくしいのかを語り合い、ときに歌った。つまりは、彼ら／彼女らにとって「うつくしさ」こそ、立ち戻るべき場所なのだ。

それは幾度となく奪われようとも、手をかけて回復させてきた数々の事柄に向けられた言葉でもあり、芸術のみに限定された言葉ではなかった。

世界を見渡してみると、「北（グローバル・ノース）」と「南（グローバル・サウス）」の深刻な不平等は、パンデミック渦でさらに加速した。奪われ、虐げられ、周縁化された者たちは日常的にその力学に曝される。しかし、ガヤルドは被害者としての立場を拒否し、その対抗手段として仲間たちと戯れ、歌い、踊り、あり得べき世界を演じ、祝福する。そこに不思議と悲壮感はない。そのことに最初は唖然とするかもしれないが、それは、かつて日本にもあった「予祝」を想起させる。農耕儀礼のひとつである「予祝」は、未来の姿を先に喜び、祝ってしまうことで現実に引き寄せる呪術だが、度重なる災厄と飢饉に苦しみ抜いたからこそ、それを跳ね返すように生まれてきた民の術なのだ。

だが、わたしたちはいつの間にか「諦めよ」「従属せよ」と嘯く巨大な力を前に、自分たちが望む世界をイメージする力さえ失ってはいないだろうか。静観し、傍観することで、世界の破局に無自覚にも加担してしまってはいないだろうか。それどころか、明日へ向かうことすら億劫になってはいないだろうか。

だとしたら、ガヤルドの作品をまずは明日への招待状として受けとって、一緒にイメージしてみるのがいい。大切な人の死後も、あなたの人生は続く。死者たちがたとえ魂になったとしても、心底戻ってきたいと思える場所をこの世につくる。そのための旅路に彼女はあなたを手招いている。抵抗は過酷なばかりでなく新たな活力を生むのだと、彼女たちのまなざしは物語っている。

清水チナツ（しみず・ちなつ／カルチュラル・ワーカー／PUMPQUAKES）
福岡県生まれ宮城県在住。2011-18年までせんだいメディアテーク学芸員。2019年コレクティブPUMPQUAKESを設立。2020年に新進芸術家海外研修制度でメキシコ・オアハカに滞在。主な企画展に「畠山直哉 まっぷたつの風景」（せんだいメディアテーク、2016）、企画・編書に民話採訪者 小野和子『あいたくてききたくて 旅にでる』（PUMPQUAKES、2019）など。

参考文献：
「ARMARTE ー女性たちの抵抗と芸術ー」
メキシコ南部のオアハカで活動する女性たちによるアートコレクティブのドキュメント。木版画制作を中心に据えながら、周辺の農村地域へ出向きワークショップやアートキャンプを開催するなど、表現や教育の機会に恵まれなかった人たちへ美術クラスを提供している。これまでの活動とオアハカの女性たちの現状について語ってもらった。
撮影：2021年　制作：長崎由幹（PUMPQUAKES）

ベティ・カリーニョ（Bety Cariño）は、オアハカ州ミステカの先住民であり、女性であり、先住民の土地と権利を守ることに従事した活動家だった。2010年4月27日、人権活動を行っていたベティを企業と癒着した準軍事組織が襲い、その命を絶つ。ベティは37歳だった。

メキシコが植民地から独立国家となり（1821）、さらに独裁政権からの革命（1910-1940）を経てなお、先住民は略奪と搾取の対象であり続けた。近代化のなかで国家政策として都市開発や基礎教育の向上が目指されても、そこで先住民の慣習や彼らが話す言語が考慮されることはなかった。また、観光産業や資源開発、グローバル企業誘致など、国家がグローバル市場に参入し利益を求めるなかで、土地と生活を損ない、被害を被る彼らの姿は無視されてきた。つまり、政府や多国籍企業は先住民コミュニティとの間でコロニアルな関係を維持しながら利益を追求してきたのだ。搾取する主体は、ヌエバ・エスパーニャからメキシコ政府へ、独裁政権から多国籍企業へと移ろっても、市場主義の要である労働力のため、土地開発のため、天然資源のため、先住民はつねに土地を奪われ、人権を蔑ろにされてきた。不可視化されたこの差別構造が決定的な形で顕になったのが、1994年の北米自由貿易協定（NAFTA）締結とそれに対して「もうたくさんだ!」と叫んだサパティスタ国民解放戦線（EZLN）の蜂起だ。EZLNは、規制緩和によるグローバル市場への参入を図った政府の新自由主義的政策に反対し、農村の慢性的な貧困状態の改善を訴えた。そして、グローバル市場のなかに埋もれてきた先住民の主体性をコミュニティの内部から回復すべく、教育活動や演説を通して先住民独自の知識に基づいた価値観の重要性を説き、自治的なコミュニティの発展を目指した。

この社会運動の系譜にベティ・カリーニョはいる。ベティに限らず、これまで多くの女性がEZLNに賛同し、闘争に参加してきた。彼女たちにとってそれは、先住民コミュニティに根強く残る男性優位主義の伝統からみずからを解放しようとする戦いでもある。と同時にベティの死は、国家と多国籍企業が抵抗運動鎮静化のために軍事組織と共謀して行ってきた家父長主義的暴力の、数多な犠牲の一片だ。拡張し続けるネオコロニアルな占有に「ノー」と声をあげ立ちはだかり、無惨に殺された先住民女性活動家たちが、ベティの前にも後にもいる。

本作は、権力を行使して人の命を奪うという横暴で卑劣な行いに対してなにができるのか、富を権力と混同し、女性を、先住民を、活動家やジャーナリストを迫害しようとする暴力の連鎖を断ち切るにはどうすればよいか、とわたしたちに問う。そしてその解決の糸口を見つけ出そうと、ベティとともにわたしたちを過去から現在へ、死者の住処である地下世界から地上へと、循環的な旅に誘う。「ホルムアルデヒド・トリップ」は、この世に存在することを強制的に断たれたベティへの悼辞であるとともに、権力に抗うためのさらなる連帯を呼びかける寓話であり、死者（ベティ）の身体的記憶と魂をわたしたちの内に蘇らせようとする神話でもある。

ベティの旅は、メキシコに関わる二つの神的または動物的存在と交差する。その一つはソチミルコ湖に生息する両生類アショロトル（別称アホロートル、メキシコサンショウウオ）だ。アショロトルこそ、ホルムアルデヒド、つまりホルマリン漬けを経験した生き物だ。ホルマリン漬けは生と死のサイクルを全うする権利を生き物から奪う。けれども、アショロトルは本作で、みずからのネオテニーという性質、つまり幼形の形態を保ちつづける力に、進化主義的に規定された真っ当性を拒絶するクィア的戦略を見出す。この湖の生き物はこうして、神的存在として、セクシュアルな媒体として、治癒を施す船として、ベティを導く。

ベティが交わるもう一つの神的存在は、夜の力を司るアステカ文明の月の女神コヨルシャウキだ。アステカ神話の世界で、コヨルシャウキは兄弟である太陽の神ウイツィロポチトリの好戦的な挑戦に敗れた結果、肢体を分断され、軍勢だった四百の兄弟とともに地下世界の底へと葬られる。本作の終盤で描かれるベティの断片化された身体は、コヨルシャウキのそれを連想する。地下世界の生き物であるクィアで褐色で人間でないギャングたちとベティの戦士たちが、みずからのエナジーを発してコヨルシャウキ／ベティの断片を繋ぎ合わせ、一つのコレクティブな身体を召喚しようとする。その姿は、社会の混迷や政治的暴力に直面したときに治癒を施す術をわたしたちに伝える。創造的な活動を通して他者と絶望や傷を分かち合い、それぞれの断片性を一つの複合性へと練り上げよう、と。

本作の作家ナオミ・リンコン・ガヤルドは、この二つの存在を中心に、地下世界に住む様々な登場人物を現代と交差させ、神話と現実、過去と現在、生と死の接続を図る。地下世界では死者の骨と灰が混ざり合い、肥沃な泥となるというメソアメリカの世界観を再現し、死者たちの住処に蒔かれた連帯の種を地上へ芽吹かせようとするのだ。先住民が今に伝える観念にならえば、ベティの死も戦士たちの死も、終わりを意味しない。むしろ、個体としての身体性が溶けて混ざり合った死者の泥はエンパワーメントの糧となり、「どうやって対抗する？」と問いかけながらより強固なサイクルを生み出す。彼女たちの死は、今を生きる「彼女」とともにある。繋ぎ合わさるベティというコレクティブな身体は、「左ききの世界」を象徴する。それはつまり、彼女たちやクィアや褐色の人間や人間でない生き物など、様々な背景をもつ存在が、その多様な必要性と関心を学び共有しながら、ともに変革を導いていこうとする共同体だ。ベティ／ナオミはわたしたちに言う、「あなたは一人じゃない　同時に多数　存在している」。

鋤柄史子（すきから・ふみこ）
境界を揺るがせ、中心の絶対性を不明瞭にするという翻訳の可能性を探求する。現在の研究テーマはメキシコ、チアパスにおける文芸と翻訳の人類学。バルセロナ大学社会人類学専攻博士後期課程在籍。訳書にエレナ・ポニアトウスカ『乾杯、神さま』（幻戯書房、2023）がある。

参考文献：
Keating, AnaLouise. ed. (2009). *The Gloria Anzaldúa Reader*. Durham, N.C.: Duke University Press.
Gallardo, Naomi Rincón. (2018). The Formaldehyde Trip: A Mythical/Critical (Under)world-Making Dedicated to Bety Cariño. *Critical Ethnic Studies*, 4(2), 39–74.
https://doi.org/10.5749/jcritethnstud.4.2.0039